

編集後記

『神奈川大学言語研究』32号は、英語英文学科深澤俊昭先生のご退職を記念して編まれた。深澤先生は1997年4月～1999年3月まで言語研究センターの所長としてご尽力下さった。先生のお陰で、『神奈川大学言語研究』は、体裁をはじめ、内容、その完成度において、年々進化していると思われる。

ある委員会でご一緒した深澤先生は、イギリスの紳士を思わせるほどのジェントルマンで、話し方が非常に丁寧だったことが私には非常に印象的であった。その後、教授会で、また20号館の前でお会いする先生は相変わらずご丁寧で、落ち着いた雰囲気にはほっとするところがあった。学生からも大変慕われたと聞いている。今後のご健勝と一層のご活躍をお祈りしたい。

深澤先生のためにご多忙のなか、献辞をお寄せくださった元同僚の岩崎豊太郎先生と教え子の白須康子先生には深くお礼を申し上げたい。

今回の紀要は、論文が5編、研究ノートが1編である。論文は、英語関連が1編、日本語関連が1編、スペイン語関連が1編、中国語関連が2編と、外国語学部の言語の多様性を反映したような形となった。原稿を寄せてくださった執筆者の方々に感謝したい。

32号から投稿規程が多少変わった。次号に投稿を予定している方々は新しい「神奈川大学言語研究投稿規程」を参考にいただきたい。また、学内の紀要ではあるが、関連分野の先生方による「査読付き」であることも念頭に入れていただきたい。

長年にわたり、『神奈川大学言語研究』の発展にご尽力された武内道子先生もご退職の年を迎えた。先生は講演会、シンポジウム、ワークショップなども積極的に開き、研究の活性化および発展に献身的だった方である。この場を借りて、先生にも感謝申し上げたい。

私自身、4年近く、辞書作りに没頭していて、しばらく言語研究から離れていた。昨年5月、三省堂から『デイリーコンサイス韓日・日韓辞典』を出版することができた。やっと研究の現場に戻ってきたような感じである。深澤先生と武内先生の言語研究への情熱と愛情を受け継いで『神奈川大学言語研究』の発展に微力ながら役立てればと思う。(Y)